

同一視形成の要因についての伝記資料による比較分析 ミヒャエル・エンデとエーリヒ・ケストナーの伝記資料を用いて

茂垣 まどか

1. 問題と研究の目的

ミヒャエル・エンデは1929年にドイツのガルミッシュに生まれ育ち、エーリヒ・ケストナーは1899年に同じドイツのドレスデンに生まれ育った。ともに一人っ子として両親から愛されて育ち、幼少期から芸術に親しみ、最終的にドイツの児童文学作家として世界的に著名になった。両者とも、父親が芸術的才能をもち、優しいが生活力がない人物であり、経済的に恵まれなかった。どちらの母親もバイタリティがあり精神的に強く父親と家計を支えていた。さらに、どちらの家族も、のちに両親が不仲になり、生涯両親の夫婦仲は復活しなかった。一方、子どもであるエンデとケストナーの人生選択についてみると、ケストナーが革職人の父親ではなく下宿人の小学校の先生に同一視したのに対して、エンデは画家である父親に同一視し、両者とも芸術家としてのアイデンティティを形成するに至った。なぜ、エンデは父親に同一視し、ケストナーは父親ではなくそれ以外の対象に同一視したという違いが生まれたのだろうか。

アイデンティティ形成にかかわる幼少期の同一視の様相とその対象について、自我心理学者でありアイデンティティの生涯発達に関する第一人者であるErikson (1959) は、「子どもの目に映る両親は、全く理不尽に危険ではあるが、非常に力強く、非常に美しい存在である。子どもは『彼らと同一視し』、両親のようになると

どのような感じがするだろうかと想像をめぐらす。」と述べている。また特に、Eriksonの自我発達論の基礎にある精神分析的視点では、3～5歳の子どもが異性の親への潜在的恋愛感情から同性の親をライバル視し疎ましく思うが、そのことで同性の親から罰せられるという不安や罪悪感(エディプス葛藤)を覚え、その解決策として無意識的に同性の親を同一視することが指摘されている(Erikson,1959)。もちろんその後の人生において、親以外の対象へ憧れ、意識的に同一視する、あるいは無意識的に同一視することも起こりうる(Erikson,1959)が、この観点からみると、基本的に両親が子にとってはじめの同一視の対象となりうる。

これまでに茂垣は、エンデの父子関係と人格発達(若原,2002)、父子関係とアイデンティティ形成(茂垣,2004)、同一視とアイデンティティ形成(茂垣,2017)について検討した。またケストナーの同一視とアイデンティティ形成(茂垣,2006,2008)について検討してきた。さらに、エンデとケストナーの同一視及びアイデンティティ形成(茂垣,2007)について比較分析を試みた。しかしこれ以外に、エンデとケストナーの同一視や親子関係、人格発達にまつわる生育史の客観的類似性・対照性に関して心理学的に論じた研究はない。

茂垣(2008)では、ケストナー個人の伝記資料を対象として、同一視とアイデンティティ形

成の様相を分析した。その結果、第1に、幼少期の同一視形成がその後のアイデンティティ形成と関連がある様相が具体的に示され、その人生における整合性が示された。また補足的に、①父親が息子の同一視の対象となる際に、父親自身の家族内での存在意義、特にそれを支える母親の父親への態度が大きく影響する可能性があることや、②同一視の対象として子の主観的位置づけとして父親が適切でなく、他に代理的役割をする対象がある場合、同一視の対象が父親でない可能性もあることなどが示された。

これは、尊敬できない父親をもつ息子の同一視・アイデンティティ形成における知見であり、対照的に、尊敬できる父親の場合はどのようなか検討すべきであろう。特に、“家庭内における父親の存在意義や母親の父親への態度が同一視形成に関連する”との知見は、父親を同一視する息子の場合についても検討することで、より明確になるであろう。

同一視形成について、親子の二者関係および三者関係を詳細かつ包括的に、心理力動的な観点から検討できるという意味で、先に述べたエディプス葛藤 (Erikson,1959; Freud,1932) 概念も取り入れた分析が有効だと考えられる。Freud (1932) の示した古典的なエディプス葛藤では、息子は母親への排他的愛情を基盤としてその配偶者である父親へを疎ましく思うが、厳格な力強い父親からその態度や考えを咎められ罰せられるのではないかという不安が生じる。その葛藤の解消法として父親への同一視がなされると言われている。このとき、両親の価値観・規範を内在化させることで心の法廷である超自我が形成される。エンデとケストナー

の父親は厳格でない優しい父親であり、かれらのエディプス葛藤は強くない可能性が考えられる。その場合、超自我はどのように形成されるのか。

したがって本論ではまず、エンデとケストナーの、同一視の様相を比較する (目的1)。次に、客観的には同じような環境でありながら、なぜ父親への同一視の様相が対照的であるのかという生育史心理学的問いを示し、その問いに対して仮説を立てる。本論では、エンデの家庭では両親の夫婦仲が良く、息子の父親への同一視が促進される一方で、ケストナーの家庭では母親が父親への息子の同一視を促進してないのではないかという観点から、エンデとケストナーの伝記資料を比較検討する (目的2)。

2. 方法

2-1. 伝記研究とは

伝記研究とは、伝記資料を分析することで、ある人物の生涯発達を研究する手法である (Erikson,1958, 西平, 1996, 大野, 2008)。この手法では、行動予測が目的である一般的な心理学の方法とは異なり、歴史的事実として結果の判明している行動について、なぜそのような行動に至ったのかについて仮説 (心理学概念を用いた解説) をたて、伝記資料から論証する。本論では、Erikson (1958), 大野 (1996), 三好 (2011) を参考にしながら、生育史心理学 (西平, 1996) の方法論に基づき分析した。具体的には、年代順の一般的な生涯の年譜を作り、伝記資料にみられる心の動きを心理学の学術用語により解釈して年譜に加える。さらに、それらの心理学的解釈の根拠資料を伝記資料から抜き出して

同一視形成の要因についての伝記資料による比較分析 ミヒャエル・エンデとエーリヒ・ケストナーの伝記資料を用いて

列挙する（列挙法）。このやり方を個人の資料について行うのが個別分析法であり、二名の人物の比較を行うのが比較伝記的方法、複数人に共通するテーマを分析するのがテーマ分析である。本論では、エンデとケストナーの伝記資料を比較伝記的方法を用いて分析した。比較伝記的方法とは、「類似した二人（ときには二群）、対照的な二人（ときには二群）について、伝記資料を使い、比較をとおして、態度、性格、生育史環境を追求する方法」（西平, 1996）である。

なお本論では、エンデとケストナーの二名の作家を分析対象とするが、その目的は、伝記資料を用いた人格形成の一般的な秩序の追求（西平, 1996）にあり、作品論、作家論などとは焦点を当てる側面が異なる。個人の伝記を資料とし、その個人の人生についての理解を深めるだけではなく、生涯を俯瞰する視野から人格発達における一般性や法則性を探索するものである（三好, 2011）。教育心理学的な立場からみて、青年のアイデンティティ形成に影響する一要因である同一視形成やその形成因について生涯発達の的に検討することは、青年理解の一助となると思われる。

2-2. 分析対象

ミヒャエル・エンデに関する伝記資料 16 冊およびエーリヒ・ケストナーに関する伝記資料 13 冊である。このうち主に分析対象としたのは、エンデ 4 冊（ボカリウス, P., 1990；エンデ, M., 1994；エンデ, M. & クリッヒバウム, J., 1985；井上・安野・河合・子安他, 1989）である。ボカリウス（1990）は伝記作家による伝記、エンデ（1994）は書簡や講演での発言等をまと

めたもの、残り 2 冊はインタビューであり、特にエンデ&クリッヒバウム（1985）は父親についての思い出や主観的体験について語られたものである。

ケストナーは 4 冊（ハヌシエク, S., 1999；ケストナー, E., 1957；ケストナー, E., 1975；コードン, K., 1994）を主な分析対象とした。コードン（1994）は伝記作家による著作、ケストナー（1975）は小作品や随筆、講演録などをまとめた文献である。ハヌシエク（1999）は中でも新しく執筆されたものであり、茂垣（2008）では明らかにされていなかった資料も示されている。またケストナー（1957）は自伝であり、幼少期を美化している側面もあるが、ケストナー自身の主観的感覚が明記されているので、他の伝記資料との整合性を確認したうえで用いた。

3. 結果と考察

目的 1 同一視および対象に対する認識についての比較

芸術家気質だが生活力に欠ける父の一人息子であるエンデとケストナーが父親やその他の対象に対する同一視はどのようであったのか。また、その同一視がアイデンティティ形成にどのようにつながったのか、比較して分析する。

1) エンデ青年期以前：父親への尊敬と同一視

エンデは、「私は子供のときから芸術家になろうと思っていました」（河邑, 1991p.134）、「当時書いた多くの詩で私は、父が絵で描いたものを、別のかたちで書こうとしたのです」（エンデ&クリッヒバウム, 1985p.161）と示されたよ

うに、父を強く同一視し父と同じ道を希望する様子を示している。エンデの父もともに絵を描き、「子どもの私が描いた絵本や絵をととても感心して見てくれました」（井上ら, 1989,p.115）などその活動を強く支援していた。経済的困窮状況については、「芸術家になるんだったら、僕は画家のようにこんなに貧乏で苦勞する芸術家でなくて、もう少しましな生活ができる芸術家になりたい」（河邑, 1991,p.134）と述べており、吟味せず従順に同一視するのではなく主体性を持ちつつ、「あんなに素晴らしい絵を描く。その父も大好き」（ボカリウス, 1990,p.58）と、父親への敬愛と尊敬の念を抱いている。

2) ケストナー青年期以前：父親への尊敬の無さと他の対象への同一視

ケストナーが革職人である父親を尊敬し、同一視するという記述はみられない。父親を「皮の芸術家であったが、劣等な商人」（ケストナー, 1957,p.55）であるとするように、ケストナーは父を嫌いではないが尊敬できない対象だと認識していると推測できるだろう。他方で、この時期のケストナー家には小学校の若い男の先生（シューリヒ先生）が下宿しており、「文字とあれば、片っ端から読んだ（中略）呼吸でもするように読んだ」（ケストナー, 1957,p.111）というほど本の好きなケストナーにとっては、ノートや赤インキ、本にあふれた先生の居室は「まだ発見していない未知の大陸」（ケストナー, 1957,p.90）であり、大変魅力的だった。シューリヒ先生は「私にとって一種のおじさんになった。私はこの先生と一緒に（先生の故郷の村に、学校ではじめての休暇に）初めて大きな旅

行した」（ケストナー, 1957,p.88）というほど仲良くなった（父代理、ななめの関係；平石, 1995）。将来の夢を尋ねられると「心の底から『先生に!』」（ケストナー, 1957,p.90）と答えていることから、シューリヒ先生へ同一視していると解釈できる。経済的困窮状況についても、「確かに第1級の職人、いや、皮の芸術家であったが、劣等な商人」（ケストナー, 1957,p.55）だと父親への否定的な表現が示され敬愛の念は示されない。対照的に、夕食に自分の家族は食べられないようなソーセージなど十分食べられることに対して、「こういう先生はほんとに悪くないな」（ケストナー, 1957,p.95）と生活の豊さを肯定的に感じていた。

実際のところ、経済的に困窮しても詩作などの好きなことができる環境を支えるエンデの父に対して、文字や本に没頭するケストナーの希望を彼の父はかなえられないと、幼少のケストナー自身が感じていたと解釈できる。

目的2 同一視形成要因に関する検討

ここでは、同一視形成の基盤となると考えられる両親の夫婦関係と子（エンデ, ケストナー）への影響、またエディプス葛藤の様相について、比較検討する。

1) エンデの両親の人となりと夫婦関係

そもそもエンデの両親の馴れ初めは、エンデの母ルイーゼが営む小間物屋に、画家である父エトガーが立ち寄ったことにはじまる。恋愛関係を経て結婚したエンデの両親は仲が良く、幼少期より「心臓に疾患があって、無理ができ」（田村, 2000 p.116）ず抑うつ体質の父を、母が

支える関係であった。父が抑うつ状態で絵が描けないときにも、母が「父のために絵の道具とか、シルバー・ポイントとか、そういったものを買って帰る」(エンデ&クリッヒバウム,1985, p.181) ことで仕事の動機づけを高めることがよくあった。さらに、第2次世界大戦のナチスドイツ政権下において、エンデの父の描く神秘的で直観的な絵は退廃芸術だとされ、絵の具の配給も行われななど困窮したが、その際も、「将来の家計を考えて治癒体操とマッサージの勉強をはじめていた」(ボカリウス,1990 p.52) 母が実質的なエンデ家の家計を支えていた。

そもそもエンデの母は「どんな困難が押し寄せても切り抜けていく力を持つ、あっぱれな」(ボカリウス,1990 p.58) 女性であり、婚前に店を切り盛りしていたように、生命力と実行力を兼ね備えていた。自身が幼少期に両親を亡くす経験をしており、愛情や正義心が強い反面、失うことへの恐れが強く愛憎の激しい性格であったが、少なくともエンデの幼少期から青年期前までは仲睦まじく過ごし、夫を支える頼もしい“姉さん女房”(7歳年長)であった。先に述べたようにエンデの父エトガーは抑うつ体質で優柔不断、生活力のないタイプだったが、エンデの母である妻に支えられることで日々の生活も芸術家としての生き方も支えられていたと考えられる。それによって、「うんと小さい頃から父と私の関係は濃密(中略)父がアトリエで絵を描いているときに、私はそばに座って、小さいカンヴァスをもらって、描いたりしていました」(井上ら,1989 p.115)とあるように、愛する息子と存分に芸術的交流をすることができた。また、絵が評価されない時期でも、「ほん

とうのところ父にはかなり自信がありました。自分の描いたものは、そしてなぜ自分がそう描いたかは、いつの日か理解されるだろうと」(エンデ&クリッヒバウム,1985,p11) 自信を失わずにいられたことは、父本人の、自分の才能に関する自信・確信によるところが大きいのだが、それに加えて妻の生活・精神的支えが、それを促進したと考えられる。このような状況では、エンデが、病弱で抑うつ体質ではあるがこと芸術に関しては自信のある父、母から大切にされ愛される父を愛し尊敬することが促進されると考えられる。

2) ケストナーの両親の人となりと夫婦関係

一方、ケストナーの両親は馴れ初めからエンデの両親と対照的である。独身で「メイドとして一生を終えるのは嫌」(コードン,1994,p.14) だという理由で、ケストナーの母イダは、「ちっとも好きになれない」(コードン,1994,p.14) 男性エミールと結婚した。ケストナーの母は結婚後も夫との愛情関係を築くことなく、実は息子ケストナーも、当時家に出入りしていた医師ツインマーマン博士との不倫の子だとの指摘(コードン,1994)があるほどである。現時点でケストナーの実父に関する真偽のほどは定かでない(ハヌシエク,1999)が、少なくとも、ケストナーは10代後半の第1次世界大戦出征前に母からそう聞かされた(コードン,1994)。この親子関係において、父だけをおいて母子で遊びに行くなど、ケストナーの父が母から軽んじられていた、という指摘は各資料に共通している(ハヌシエク,1999;コードン,1994;高橋,1981)。また、父が職人気

質で商売に向かないことからケストナー家の経済状況が悪化し、父エミールは副業として、芸術家として好まないような皮革工場での仕事もせざるを得なかったうえ、母イーダが新しく美容技術を取得し、家計を支えることとなった。

「母は何か職を身につける決心をした。私の母が何か決心すると、それを妨げることをあえてしうる人はいなかったらう」(ケストナー, 1957,p.131) とケストナーが述べるように、ケストナーの母イーダもエンデの母と同じく、意志の強くバイタリティあふれる女性であった。また、母イーダの意志の強さは子への愛情としても示され、「むすこの完全な母親になろう」(ケストナー, 1957,p.161), 「狂熱的に、わたしというただ1枚のカードに一切をかけた」(ケストナー, 1957,p.161) というほど、ともすると支配的なほどに溺愛し、夫エミールと息子の愛情を取り合う関係だった。

一方ケストナーの父エミールは芸術家気質の腕の良い職人だったが、「決して壊れないランドセルを作る」(ケストナー, 1957, p.55) 商売には向かない質である。基本的に穏やかで優しく愛情ぶかいパーソナリティであり、自分ひとり残して遊びに行く妻と息子に対しても、お揃いの素敵なりュックを作ってやり、家の掃除をしてふたりの帰りを機嫌よく待つなどしていた(ケストナー, 1957,p.218-219)。先のエンデの両親と対比的にみると、芸術家として妻の支えもあり自信を失わず息子と交流したエンデの父と比べると、ケストナーの父は息子との体験共有をすることもなく、むしろそれはケストナー母の位置づけであり、必然的に息子ケストナーが父の芸術・職人としての技術を身近で

日々体験し同一視する機会はほとんどなかったと言えよう。

以上のように、エンデとケストナーの両親に共通するのは、バイタリティあふれる意志の強い母親と、精神的に優しく相対的には母より弱い、芸術家気質の父親という点である。しかし、母親の父親に対する愛情・配慮や態度は対照的である。エンデの母は夫を愛し支えているのに対し、ケストナーの母は夫を愛さず軽視し、ケストナーの父の家庭内での存在感は低かった。この点が、子が同性の親を同一視する程度に関する、一つの大きな要因となっているのではないだろうか。

3) エンデとケストナーのエディプス葛藤および超自我形成の様相

さらに心理力動的に分析を試みたい。エンデにもケストナーにも、強いエディプス葛藤の様相はみられない。この理由について母への愛情、父へのライバル視といった関連要因を分析すると、両者とも母親を愛しているが、どちらの父も、厳格ではなく優しい性質を示している。たとえばエンデ自身が、「父と言うより、本当にいい遊び仲間でした。遊びながら喧嘩するときにも、本気でした。」(井上ら, 1989,p115) と述べるような、親子の上下を示すような威圧的縦の関係は示されておらず、明確な壁(ライバル)であり自分を罰する存在としての認識が非常に低い可能性が考えられる。またケストナーの父は、妻子から軽んじられても、自分を置いて二人だけで遊びに出かけるような場面でも快く送り出すなど、日常的に穏やかに過ごしており、息子がその母(自分の妻)を独占する状況

でも息子の壁となりえていない。そもそも、母親を愛し父の座を奪いたいという潜在的欲求がエディプス葛藤の一局を担うので、母親に愛されないと認識されている父は、ケストナーにとってライバルになりえず、エディプス葛藤が生じない。このように父息子の関係、その前提としての両親の関係はエンデとケストナーで対照的であるが、強いエディプス葛藤を生じない状況である点は共通している。

3) 両者の超自我形成

では、両者の超自我形成はどのようなものであったのか。先に示したように、エンデの父は芸術に関しては自信があり、エンデは父のような芸術家になりたいと強く同一視している。またエンデの芸術観や芸術の取り組み方をみると、父親を模倣し強い影響を認識していることから、エンデの価値観は父エトガーに強く影響されたと考えられる。超自我の大きな役割は前述したように社会的規範や善悪判断といった「心の法廷」であるが、他にも理想のあり方・生き方の指針を示す役割も存在する (Freud,1932)。この理想のあり方を示す役割を取り出して自我理想 ego-ideal と呼ぶ場合もあり、自我に罰を与える超自我の法廷の役割に比較すると、自我主体的な心の指針である (西平, 1996)。厳しい罰などで強制されることなく生き方の指針に従ったエンデの場合、この自我理想が色濃く形成されたのではないかと考えられる。

一方ケストナーは、少なくとも青年期以前は父を好きではあるが軽んじており、家庭内での父親の地位も高くないことから、その生き方に影響されたとは考えにくい。アイデンティティ

形成の軌跡をみると、ケストナーは教師を目指し師範学校に通うが教員にはならず、最終的に教師的役割の作家となった (茂垣, 2008)。そこで人生全体としてはシューリヒ先生に強く影響を受けたが、エディプス葛藤の時期が3~5才で学齢期より前であることを考えると、超自我形成にまで寄与したとは考えにくい。他方で、母親との関係において興味深い記述がみられる。母が「完全な母親」(ケストナー, 1957p.161) になろうとしたという指摘は先にしたが、それに対してケストナーは自身を振り返り、「私は完全なむすこにならねばならなかった (中略) ともかく私はその試みをした。私は母の才能を、つまりその実行力、功名心、知力を受け継いだ。」(ケストナー, 1957p.161) と示している。つまり、ケストナーの場合、母親の支配的かつ独占的な愛情を一身に引き受けたために、母親に強く影響された「~すべき」という色の濃い超自我形成がなされた可能性が示された。しかしこの点については、さらなる慎重な検討が必要となろう。

4. 総括:エンデとケストナーの同一視形成と、そのベースとなった生育環境

本論の伝記研究における生育史的問いは、客観的には同じような環境 (一人っ子、優しく芸術家気質だが生活力の点で頼りない父、生活力にあふれるバイタリティある母) でありながら、なぜ父親への同一視の様相が対照的か、というものだった。またさらなる分析視点として、エディプス葛藤の様相や超自我の形成に関する類似点・対照点についても考慮して分析した。

1) 両親の夫婦関係と息子の同一視

エンデもケストナーも、父親は芸術的な気質を持ち、優しく権威的でなく、生活力がない。しかし、幼少期の父親の家庭における存在と、母の父への感情・態度、家族の力動性は異なっている。

エンデの父エトガーは、実生活においては生活力がないが、芸術にはしっかりと自信を持っていた。また経済的だけでなく精神的にも、母が愛情深く父を支えていた。さらに「父がちゃんと仕事にむかっていた時期は、じっさいいつもとてもすばらしい時期…家中の雰囲気が積極的に、気持ちよく、生きいきしていました」(エンデ&クリッヒバウム, 1985 p.46) とあるように父の存在感は強く大きいものであり、エンデは父に対してある程度の強さを感じ、同一視の対象とするに足る尊敬の念を感じていたと考えられる。優しく厳格さのない父エトガーは、典型的父性としての象徴としての父親ではないとしても、エンデにとって「あんなに素晴らしい絵を描く」(ボカリウス, 1990p.58) 芸術家として、同一視の対象たり得ただろう。

それに対して、ケストナーの父エミールは革職人としては芸術的な才能を持っていたが、商売が下手なために家庭は困窮した。「確かに第1級の職人、いや、皮の芸術家であったが、劣等な商人…売り上げは終始低かった。失費は終始高かった」(コードン, 1994 p.55-56) という記述にも示されるように、ケストナーにとって父は「ダメなパパ」(ケストナー, 1957 p.78-79) であった。また母は結婚する前から夫を愛しておらず、息子と母子カプセル的な関係を築き、夫を軽視する生活を送った。ケストナー

の父に関する幼児期の言及はかなり少なく、少なくとも尊敬しているという記述はない。青年期以降の記述も、母親が父親をないがしろにすることを気の毒に感じる、子どもの頃(結果的に)軽視する態度をとったことへの罪滅ぼしをしたなどである。つまり、ケストナーにとって父は、嫌いではない同情するが尊敬できない相手だと推測できるだろう。その理由について、エディプス葛藤の観点から、大好きな母から愛されない存在である父には同一視できないという心理力動が考察された。一方ケストナー家には、後にケストナーが通う小学校の先生であるシューリヒ青年が下宿人として同居していた。文字の世界が好きなケストナー少年にとって、本という「宝の山」を持っている先生はあこがれる対象となりえただろうし、シューリヒ先生は単に学校の先生ではなく、学校の休みに遊びに行くなど非常に仲がよくおじとおいのような関係・ななめの関係(平石, 1995)であった。かくしてケストナーはシューリヒ先生に同一視し、「学校の先生になりたい」と考える。第Ⅲ段階(3~5才)の時期に子どもが親以外に同一視する可能性とその理由に関して Erikson は次のように指摘している。「重要なのは、子どもたちが、同性の親から最も主要な不平等を(親にはかなわないということ)を)思い知らされたくないという点である。彼らは同性の親に同一化し続けている。しかし当面は、あまり深い葛藤や罪の意識を感じることなく、表面的な同一化によって、自主性の場が約束される機会を求める」(Erikson, 1959)。この Erikson の指摘を、本研究におけるケストナーの心理力動あてはめると以下のように考えられる。上述のごとく、

ケストナーは父親を嫌いではないが尊敬して同一視することができない。それは単純なエディプス葛藤とは異なるがケストナーに葛藤を生じさせたと考えられる。実際、ケストナーは母とともに行動としては父を軽んじていたが、そのような扱いをうける父に対して青年期以降、憐憫の情、また自分もそのような行動をしたことから、罪悪感を示している。ケストナーにとって、このように複雑な葛藤 (Erikson,1959) を意識しないで済む対象は、ちょうどシューリヒ先生だったのではないだろうか。

以上のように、家族内での心的な力関係、特に両親の愛情関係や子に対する態度が、子の同性の親への同一視に影響すると考えられる。

2) 「現実的な第二の同一化」 (Erikson,1959) :

さらにここで、Erikson (1959) の「現実的な第二の同一化」形成に関する論を、この二者の伝記資料に流し込んで考えると興味深い。Erikson は、親と共同作業する (一緒に遊ぶ、何か作業する) 体験を通して、象徴的親 (元型的) への同一化から、具体的かつ現実的なアイデンティティ形成へとつながる「第二の同一化」を形成していくと指摘している。一緒に作業することで、完全に超えられない壁として感じられる同性の親 (ここでは息子にとっての父親) に対して以下のような心理的变化が起こるといふ。つまり、「わかりやすい技術的な作業と結びつく形で、父親と息子の間に仲間意識が育つ。これはタイム・スケジュールにおいて平等ではない (年の差がある) にもかかわらず、本質的なところで、人間としての価値において平等という経験」 (Erikson,1959) であるという。こ

のように考えると、エンデもケストナーも、対象は異なるが同様の体験と同一化形成のプロセスをたどっていると解釈することができる。エンデはアトリエで父の横でカンヴァスをもらって絵と一緒に描くなどの体験をしている。またシューリヒ先生は、小学校の先生ではあるが下宿人として長年同居し、ケストナーは先生の部屋で本やインクなどを憧れの気持ちをもって眺め、部屋で書き取りやピアノの練習をしていた。さらにケストナーは小学校初めての休みに、シューリヒ先生と旅行をするなどの経験もしている。こういった経験が加わることで、ケストナーは親ではないシューリヒ先生へ「第二の同一化」を形成していったのではないだろうか。

今回の比較的伝記法から、第1に、父親が息子の同一視の対象となる際に、家族内での存在意義、特にそれを支える母親の父親への態度が大きく影響する可能性があること、第2に、Erikson (1959) が指摘している、同一化が、具体的な日常的体験、それも同一視の対象との共同作業体験によって具体的かつ現実的なものとなっていくこと、第3に、その同一視の対象が、父親でない可能性もあること (ただし、シューリヒ先生の場合、同居していることや本当の親戚のように仲がよくなったなどの条件も加味されている) が示されたと言えよう。

以上、本論で得られた青年のアイデンティティ形成に関わると考えられる同一視形成の要因についての知見は、教育に携わり青年の人格発達や人生選択に直面するうえで、本論で得られた知見が青年理解の一助となるのではないかと考えられる。しかし、それが現代青年にどのようにあてはまるかさらなる検討が必要だと思

われるので、更なる調査・研究を進めたい。

【引用文献】

ボカリウス,P. 1995 ミヒャエル・エンデ
物語の始まり 朝日新聞社 (Bocarius,P.
1990. Michael Ende: Der Anfang der Gesc
hichte.)

エンデ,M., クリッヒバウム J. 1988 闇の考
古学 岩波書店 (M. Ende & J. Krichba
um. 1985. Die Archäologie der Dunkelheit:
Gespräche über Kunst und das Werk des
Malers Edgar Ende. Stuttgart: Litera But-
und Werlags-Aktiengesellschaft.)

Erikson,E.H., 1958 Young man Luther : a stu
dy in psychoanalysis and history. Peter
Smith Pub Inc. (青年ルター 西平直訳
2002 東京:みすず書房)

Erikson,E.H. 2011. アイデンティティとライ
フサイクル (西平直,中島由恵 訳). 東
京:誠信書房.(Erikson, E.H. (1959) . Id
entity and the life cycle: selected papers.
New York: International Universities Pre
ss.)

Freud,S., 1963 古沢平作 (訳) フロイド選集
3: 続精神分析入門 東京:日本教文社
(原著刊行年次, 1932年)

ハスシエク, J. (著) 藤川芳朗 (訳)
1999/2010 エーリヒ・ケストナー: 謎を秘
めた啓蒙家の生涯. 白水社

平石賢二 1995 第5章 青年期の異世代関係
—相互性の視点から (講座生涯発達心理
学 第4巻 自己への問い直し—青年期
金子書房)

井上 ひさし (著), 安野 光雅 (著), 河合 隼雄
(著), 子安 美知子 (その他) 1989 三つ
の鏡—ミヒャエル・エンデとの対話 朝
日出版社

Kästner,E., 1962 高橋健二 (訳) わたしが子
どもだったころ 東京:岩波書店 (原著刊
行年次, 1957年)

河邑 厚徳 (著), 田村 都志夫 (翻訳) 1991 エン
デの文明砂漠 ミヒャエル・エンデと文明
論 アインシュタイン・ロマン <6> NHK
出版

コードン,K. 1999 那須田淳・木本栄 (訳)
ケストナー: ナチスに抵抗し続けた作家
東京:偕成社 (原著刊行年次, 1994年)

三好昭子 2011 有能感の生成と, その後のア
イデンティティに基づいた生産性につ
いての伝記資料による比較分析: 谷崎潤一
郎と芥川龍之介の伝記資料を用いて 発
達心理学研究, 22 (3), 286-297.

茂垣 (若原) まどか 2004 ミヒャエル・エンデ
における, 心理的離乳とアイデンティティ
形成の関連についての伝記分析. 日本教育
心理学会第46回総会発表論文集, PF44.

茂垣まどか 2006 エーリヒ・ケストナーのアイ
デンティティ形成と理想視の関連につ
いての伝記分析. 日本教育心理学会第48回
総会発表論文集, 48, PC025.

茂垣まどか 2007 話題提供: M, エンデと E,
ケストナーの同一視およびアイデンティ
ティ形成に関する比較分析 (大野久, 西
平直喜, 三好昭子, 内島香絵, 茂垣まどか
ラウンドテーブル R26 「エリクソンの伝記
分析 (心理歴史的接近法) と漸成発達理

同一視形成の要因についての伝記資料による比較分析 ミヒャエル・エンデとエーリヒ・ケストナーの伝記資料を用いて

- 論の展開) 日本発達心理学会第 18 回大会発表論文集, 227.
- 茂垣まどか 2008 アイデンティティ形成と同一視の関連性: エーリヒ・ケストナーの, 育ての父および小学校教師への同一視の伝記分析から 教職研究 (立教大学 学校・社会教育講座 教職課程 紀要) 19 号, 1-10
- 茂垣まどか 2017 話題提供「伝記にみる同一視とアイデンティティの選択: 親子関係に焦点をあてて」(自主シンポジウム「伝記に見る親子関係とアイデンティティ形成」) 日本青年心理学会第 25 回大会発表論文集, p.19.
- 西平直喜 1996 生育史心理学序説. 東京: 金子書房.
- 大野久 1996 ベートーヴェンのハイリゲンシュタットの遺書の「自我に内在する回復力」からの分析 青年心理学研究, 10, 67-71.
- 大野久 2008 伝記研究により自己をとらえる. 榎本博明・岡田努 (編), 自己心理学: 1 東京: 金子書房.
- 高橋健二 1981 ケストナーの生涯 駈々堂
- 田村都志夫 (聞き手・編訳) 2000 ものがたりの余白 エンデが最後に話したこと 岩波書店
- 若原まどか 2002 話題提供: エンデ, M. の父子関係と自我理想形成の関連 (大野久・若原まどか・三好昭子・西平直喜 シンポジウム「伝記分析 (生育史心理学) からみたアイデンティティ形成」). 日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集, 44, S72-73.